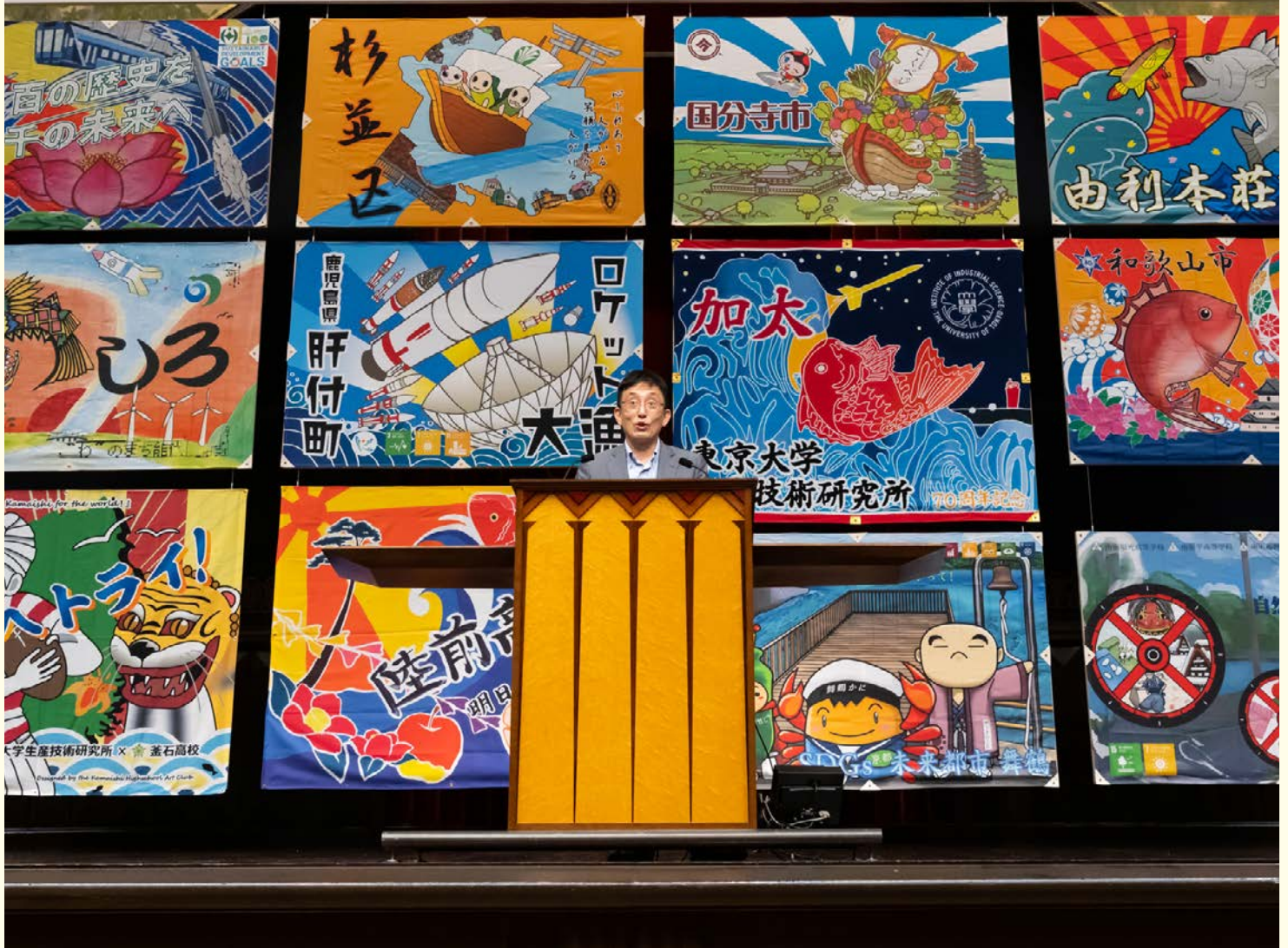


学内六報

2021.7.26

no. 1548

東京大学生産技術研究所 設立70周年記念事業
科学自然都市協創連合 設立記念事業 大漁旗プロジェクト フィナー



7月4日、大漁旗プロジェクトのイベントで挨拶する生産技術研究所の岡部徹所長



策定に向けて検討が進む東大の活動指針
UTokyo Compassの現在
MOCHAを開発した学生チームに聞く
令和2年度入学者歓迎式典

10月の策定に向けて検討が続く東大の活動指針

UTokyo Compass の現在

藤井輝夫総長の任期中の東京大学が目指すべき方向性を示す基本方針として検討が続いている「UTokyo Compass」。Ver.0という位置付けの素案ができたのを機に、ビジョン検討TF(タスクフォース)の5先生にZoomで集まっていただき、この6年間の東大の行方を示す構想はどんなものなのか、これまでどのようにして検討が行われてきたのか、これから10月の策定までにどのような進化を遂げるのか、座談会形式で語っていただきました。

ビジョンTFメンバー座談会で
見えてくる現況とこれから



TF座長
執行役・副学長
佐藤健二

TF副座長
総長特任補佐
有馬孝尚

工学系研究科
教授
熊田亜紀子
(所用で部分参加)

人文社会系
研究科教授
村本由紀子

総合文化
研究科准教授
鶴見太郎



※1『東京大学アクション・プラン2005-2008』



※2『東京大学の行動シナリオ FOREST2015』



※3 座談会に参加した5先生のほか、稲見昌彦、芦原聡、齋藤希史、岩田寛、岩田忠久、岡田由紀、武藤香織の7先生がTFのメンバー

佐藤 法人化を前に大学のあるべき姿を打ち出したのが東大憲章(2003年)で、その理念を任期中にどう進めるかの指針が、小宮山宏総長のアクションプラン^{※1}であり、濱田純一総長の行動シナリオ^{※2}であり、五神真総長のビジョン2020でした。行動シナリオに関わった面々がビジョン2020委員ともなり、その中で残っていた私に声がかかったようです。総長と相談し、キャンパス、文理、ジェンダー、専門の別等を加味してTFメンバー^{※3}を選びました。結果的に総長補佐を経験し式辞に関わった委員が多くなっています。鶴見先生はまだ6年目ですが白羽の矢が立ちましたね。

鶴見 研究科長補佐として教養学部でオンライン授業移行の仕事をしたので、その経験を伝えるのが役割かなと思いました。当初から対話や人を大事にすることを強調する総長に共感を持ち、後押ししたいと思いました^{※4}。

村本 お声がけいただいた時は青天の霹靂で

した。候補者リストのなかに総長補佐同期の岩田忠久先生のお名前があったので、その日のうちに相談しました。どのように指針作りを進めるのか、そもそも私に何ができるのか、と不安を感じたことを覚えています。

佐藤 発足にあたって、総長が細かく指示を出したわけではなく、対話、多様性、デジタル化といった重視したい項目を提示して、どうふくらませるかにはTFに託すというスタイルでした。なので、総長も会議に参加してともに考える形にしようかと提案しました。

総長自身もTFに参加しています

有馬 毎週月曜に定例会議を行っていますが、総長はほとんど毎回参加していますね。1月末から始めてもう20回ほどやっています。

佐藤 コンパスという名前は早いうちに挙がりました。総長の研究の場が海洋だったことから、海や指針のイメージは初期から共有し

ていて、ほかに「ナビゲーション」「ウェイポイント」といった案もありました。歴史上、大航海時代を象徴するコンパスは、西洋の植民地支配を開いたという意見もありましたが、この語の意味はそれだけには限られない。受験産業でよく使われる言葉だがいいのか、という指摘もありました。よく使われる言葉ほどプラスもマイナスも帯びていますが、一方で知られた言葉でないと弱い。慎重に選ぶ必要がありますが、最後はいまどんな意味を込めて使うかの問題だと思います。

熊田 私はTFに参加して、言葉一つひとつをこれだけ精査して選ぶのかと驚かされました。

村本 対話と共感、誰もが来なくなる大学といったコンセプトを総長は当初から示されました。それらを共有するのが序盤のTFでした。

熊田 東京にある一大学の話ではなく、日本全体、世界全体を変えるという大枠で考えないといけないことを実感しました。いろいろな分野の先生と話せたのもよかったです。私の分野だと、たとえば安心して便利な電力システムをつくる場合に、技術的な課題を解決していくのと同時に、いくらまでお金をかけるのがいいのか、ということまでは考えます。絶対停電を起こしてはいけないという考え方でやると、“軽自動車注文したはずなのに頑丈な戦車が出てしまった”ということになってしまうからです。ただ、なかなかそれ以上の、人間の幸福と結びつけた議論や考察などはやったことがない。なぜ経済性とまらでいてはいけないかを考える好機でした。

佐藤 熊田先生は「研究は料理である」ということを検討の中で提案してくれましたね。コンパスに入れようとしたけど難しかった。

有馬 牛乳がヨーグルトになる話は入学式の式辞に入りました^{※5}。指針を作るTFですが、総長の最初の発信ということで式辞も考える場となり、混同しそうでしたが、佐藤先生が数多の材料を料理してまとめてくれました。

OMNIの事例でイメージを共有

村本 式辞のお手伝いをするなかでイメージが具体化し、総長の生研デザインラボ^{※6}での実践がまさに対話なのだと思えました。研究者、デザイナー、海好きの市民、高校生など、多様な人たちが関心を共有することで新しいものが生まれたという「OMNIプロジェクト」です。そうしたエピソードに、TFの

様々な分野の先生の話が組み合わさって骨子ができてきた感じです。たとえば対話については鶴見先生から多くのインプットがありましたね。

鶴見 対話は大学と本来的に相性がいい概念ですが、その実践は難しい。オンライン生活ではさらに難しくなります。普通に会話することも含むので簡単に言えるし軽い意味で終わりがちですが、広がりをもたせてどう実践するかを定義づけしようと思いました。「対話しよう」には誰も反対しませんが、どこまでやるのか、どうやれば効果的に対話を継続できるのかとなると、簡単ではありません。式辞では対話の3つの定義をしました^{※6}。2つ目の定義では、言いたいことを言う前に相手のことをよく知ろうと書いています。相手に伝わる言葉を使わないといけないという側面に注目する。それが知ろうとする実践です。知らないことを知ろうとするのは大学では基本の「き」。大学の得意分野を大々的に進めるということでもあります。

佐藤 主体が積極的に対象と関わって相手の声を聞かないといけないし、相手と対面して話し合う関係を維持しなければ対話になりません。単純に仲良く話すだけではないんです。なぜ「知ろうとする」のか。コミュニケーションで終わるものでも、合意すればいいわけでもない。ポリフォニーとしての対話は、一致だけを最初から目指さない多様な声の響き合いを受容すること。大学では、答に早くたどりつくことでなく、問いを共有してともに探求することが重要です。そういう場として大学を位置付けたいのです。

Perspectiveが3つになった理由

有馬 対話の重要性は、知、人、場のパースペクティブ、すべてにつながる話ですね。3つのパースペクティブは、わかりやすいと感じる人とわかりにくいと感じる人がいるようです。4象限にわけて分析的に考えるか、画像の3原色分解のように同じものを違う角度から見るかの違いだと思います。佐藤先生は3という数に当初からこだわっていましたね。

佐藤 1は平板、2だと閉鎖的で対立的、4だと二項対立2つに分裂し、5つ以上は整理しにくい。最小の数で動きや多様性を示せるのが3です。あと、研究、教育、経営といった機能的な概念より、具体的な事物を指す言葉のほうがいいと思いました。知、人、場の具

^{※4} 鶴見先生は去年10月に渋谷キューズのQWSアカデミア「東京大学でオンライン授業はどう行われたか」で講演。その際に藤井先生も会場にいて、講演後に話す機会があったそうです。

^{※5} (スイスに1年滞在中の自炊生活を振り返り)「無殺菌の牛乳は日が経てばヨーグルトになります。ヨーグルトは、さらに日が経てばカビが生えてきます。そんなことがとても新鮮でした。現地の食や素材に関する考え方に触れ、生活者としての視点を得たことは、そこで人びとと共に仕事をする上でも役に立ったように思います」(令和3年度入学式総長式辞より)

^{※6} 「第1の意味は、向かいあって話すことによって、ある問題に対する理解を深め、解を探っていく。いわば、真理に到達するための対話です」「第2の意味は、すなわち答えを探るよりも、まず対話の相手を全体として受け止め、対話の相手として信頼し、そこから自分に向けられた声を聞き取るという、共感的理解のための対話」「第3の「対話」は、「ポリフォニー」としての対話である」(令和3年度入学式総長式辞より)



UTokyo Compassが掲げる3つの基本方針

※p.7の中段をご参照ください

※7 設定されているWGは、研究、教育、協創、DX（デジタルトランスフォーメーション）、GX（グリーン〜）、CX（コーポレート〜）、Diversity & Global、MX（マネージメント〜）の8つ

※8 総長対話シリーズは、5月13日に開催した総合文化研究科（363名が参加）を皮切りに、7月27日まで12回行われる予定です。1回目は総合文化研究科長の森山工先生が、2回目以降は広報戦略本部長の武田洋幸先生と広報室長の横山広美先生が司会を務めています。教職員との対話の後、学生との総長対話も実施することが検討されています



Ver.0では本学がなすべき実践として、1つの基盤と3つの視点（パースペクティブ）が記されました。「UTokyo Compass素案（Ver.0）概要」より

体性に焦点をあてたかった。この3つは東大の構成要素を分類する箱ではありません。知の生産という側面から東大を見たらどうか、人を育てる側面から見たらどうか、場をつくる側面から見たらどうか、という視点です。場の部分に、空間や制度の話と、経営のように大きくて抽象的なものが両方入っているのがわかりにくさの原因かもしれません。後者は3つのパースペクティブから離そうか、という議論をしているところです。

有馬 たとえば今回、アクションの部分で新しい基金の構想を記しました。簡単に言えば、目的を指定しない寄附を受けて、より自由度の高い経営を行うための基金です。大学には、世界のすばらしい未来を語る面とは別に、自律的な経営体としての面もあります。従来 of 国立大学法人モデルからはみ出る部分が生じるので、新たな会計手法を作るなど技術的な面における努力も必要です。ここは組織のプラットフォームという位置付けにしたほうがよさそうです。

佐藤 たとえば、大学債を人件費に使えないといった制度的な課題がありますが、これもプラットフォームの問題ですね。

有馬 8つのWG^{※7}のうち、MXには総長や学外有識者も入って、6年間でいくらあると何ができるのかを検討しています。今回のWGの設定には大きな特徴があります。タテに切るのではなく複数の分野を組み合わせた形です。総長がデザインラボで手応えを感じたやり方を応用して導入したのだと思います。

対話の実践としての指針策定

佐藤 総長対話シリーズ^{※8}を通してこのVer.0をお示しし、部局での検討をお願いしています。アクション部分の表現など、意見をまとめて10月のVer.1に反映させたい。決まったものを発表するのではなく、作成中のものを共有して高めるやり方を試みています。

有馬 ビジョン2020では「公表にあたって」の完成版を10月に発表しましたが、今回は6月に案の段階で示しました。大きな特徴だと思います。

佐藤 これは対話の実践です。Ver.1が出て終わりではなく、2年に1回ぐらゐの頻度で更新していくイメージがあります。

有馬 今年は株主総会を11月にやる予定で、ホームページで公表する以外の学外向け発表

としてはそれが最初になりそうです。

佐藤 中期目標中期計画の提出をにらみながらコンパスを形にするのもTFの役割でした。

有馬 コンパスは藤井総長の6年間の任期中の話が主ですが、より長い目を見た方向性も示したいという面もあります。ビジョン2020は総長の在任期間のビジョンでしたが、コンパスでは年次を入れていません。

佐藤 任期で実現できることを書くのでは長期的な自律性につながらないので、長期的視野の下での6年間という意味をこめました。

村本 私のような一教員がTFに参加していることも含め、あらゆるプロセスで様々な人との対話を重視しながらつくる姿勢が貫かれていると実感します。ただ同時に、ボトムアップだけがよいわけではないとも思いました。実施したいアクションが多くあっても、どこまでやるべきか、本気でやってよいのか、現場はその指針を求めています。トップダウンとボトムアップの良いバランスを見出すためにも、立場の違いを超えて対話の場でリクエストできることが大事ですね。

自分から対話を求めることの意義

鶴見 日本社会では特別視されがちな東大が対話に出かけて同じ目線でコミュニケーションすることは、東大の可能性を広げるでしょう。社会との関わりは、理系の産学連携が主で、文系の連携は限定的でしたが、たとえば公共の部分で文系が機能を果たせる領域があるはず。人々の幸福につながるような領域を探しに出ることが重要だと思います。学内では、本部が部局と対話することで広がりのある判断ができるようになるはず。潜在的な需要や困りごとを自分から聞きに行くことが大事です。大学は一つの目標に全員で突き進む企業とは違い、個々の構成員が各々創造的に活動するための媒介になるのが役割です。いまはオンラインで知識伝達がやっとなのですが、教員が知を伝えるだけでなく、学生同士がつながるための媒介としての役割を果たせるとよいのですが。

佐藤 大学の「経営」はまさにその意味で再検討されるべきですね。企業と違う大学の役割のデザインと捉えてもいいでしょう。知や人や場の構築を通じた公共性への貢献を大学としてどう打ち出すのか、コンパスの作成過程でも問われているように思います。

MOCHA を開発した 学生チームに聞く

噂の教室混雑度表示アプリはいかにして生まれたのか？



政府の接触確認アプリCOCOAの機能を補うようなアプリとして注目されるMOCHA。東大の学生チームが開発と運用を担当しているのは知られていますが、これがどのようにして生まれたのかはあまり知られていないようです。そこで広報課ではチームに取材を打診、活動拠点の研究室にお邪魔して主要メンバーの4人に話を聞きました。



教養学部2年
大野智洋
さん
広報担当

工学部4年
海老原祐輔
さん
ウェブ担当

工学部4年
伴玲吾
さん
アプリ担当

情報理工学系
研究科修士課程
山下陸さん
アドミン担当
(写真はNG)

手前はPR用ポスター。ノートPCに映るのはアプリ開発画面

設置したビーコンは2cmほどの大きさ。1台1000円ほど



駒場の教室にビーコンを設置するチームメンバー。工学部と教養学部を中心に全学では1600台ほど設置済み



ハイブリッド授業の準備として

山下 去年の4月頃、キャンパスデータを考えるワーキンググループで何かできることはないかと検討が始まったそうです。検討の中で大学の部屋には全て固有のIDが付いているとわかり、部屋にビーコンという発信装置を置いてアプリ入りのスマホで構成員の滞在を把握するという基本構想が固まったのが7月頃。川原圭博、瀬崎薫、西山勇毅の3先生*が旗振り役となり、西山先生がまずアプリの原型を作りました。

大野 7月末に学生向けに募集があり、それを見て集ったのが僕たちです。8月の説明会を経て9月にアプリをテストしました。駒場の150室ほどを約20人で回ってビーコンを設置し、Bluetoothで信号を拾えるか検証したんです。

海老原 教養学部でハイブリッド授業が増えることを見越した試みでした。オンライン授業と対面授業が同日にある場合、構内の空き教室でオンライン授業を受けることができないと、とても効率が悪いです。

山下 実験では、部屋の端にいると隣の部屋のビーコンを感知する場合があります。ただ、壁を通った信号は減衰して強度が落ちるのでそこを踏まえて調整すればよいということもわかりました。

海老原 実験の一方、9月にはデザイン関係のワークショップを1日5時間×3日で集中開催しました。デザイナーの保田容之介先生の指導の下、温かみと安心感を与えるオレンジをイメージカラーに決定。ロゴは、MOCHAの「m」、場所を示すピン、ビーコンの電波、銀杏などを意識しました。

COCOAとの知られざる関係が

伴 ネーミングは、ある学生がSlackで提案したものが採用されました。ココアと親和性が高い言葉として選ばれた面もありますが、本人とはあるアニメのキャラクターをイメージしたようです。アニメ好きはすぐにピンときて反応していましたね。

海老原 チーム名は「東京大学MOCHAプロジェクト」と決め、アドミン、アプリ、サーバー、ウェブ、広報、デザイン、規約、英語のサブチームに分かれて作業を続け、11月1日にサービスを開始しました。

大野 広報班はデザイン班が作ったポスター100枚を駒場の教室に貼って回りました。ほぼ1人で細かい規約を書きまくり、アプリのアップデートのたびに更新し続けた先輩は、いま省庁に入省して働いています。

山下 始めてみると課題が幾つも生じました。電池の消費が速い、アップデートの通知機能がない、教室の前を通過しただけで滞在と見なされる、Bluetoothや位置情報をONにしないと作動しないのに機種によって設定方法が違って案内しにくい、最初にビーコンのある場所で設定する必要がある……。精度を左右する3番目の課題は、検討を重ねてUI (User Interface) で対応したんですが、今後はアルゴリズムのほうで対応したいと思っています。これに関連するセンサー配置問題は、数理工学上のホットなトピックでした。

伴 基本的には部屋の混雑度がわかるアプリですが、オンライン授業が受けられる教室を知りたいという需要に応えるため、教室の種類、コンセント数、声出しOKか否かの情報も実装しています。

山下 コロナ感染が判明した場合に感染者の過去の滞在情報を匿名で通知する仕組みもあります。春に関係者が感染した際は、実際にこの仕組みで濃厚接触者がPCR検査や抗原定量検査を大学負担で受けることができました。

構成員間の交流を促す効果も！

伴 今年4月に始めた新機能として、プライベートチャンネルがあります。通常は個人情報匿名化されていますが、登録者の同意を得て設定すると、いま誰が部屋にいるかがわかるんです。今日は〇〇に詳しい△△さんが研究室にいるから行って話を聞いてみよう、というような使い方もできるので、先生方も重宝していると聞きます。

大野 現在のアカウント登録数は5260ほど。利用者もビーコン設置も工学部と教養学部が中心ですが今後はもっと広げたいです」

山下 位置情報のインフラとして考えると様々な使い道がありそうなので、その部分を考えていきたいですね。プライベートチャンネルは一つのヒントになりそうです。

川原研究室で撮影されたジャルジャルのコント動画「[「ため口な奴」でわかる接触確認アプリMOCHA]には大野さんと海老原さんも出演！



*所属は順に工学系研究科、空間情報科学研究センター、生産技術研究所



令和2年度東京大学入学者歓迎式典が6月26日(土)、27日(日)に、大講堂(安田講堂)において挙行されました。この式典は、令和2年4月に予定されていた入学式の式典が新型コロナウイルスの感染拡大を受けて中止となったことを受け、改めて令和2年度入学者を歓迎する機会として設けられました。学部入学者を対象に6回(第一部～第六部)、大学院入学者を対象に2回(第一部、第二部)の合計8回が2日間にわたって挙行され、合計で約2,100名の学部生と、約700名の大学院生が出席しました。式では、アカデミック・ガウンを着

用した総長、理事・副学長、教養学部長(学部各部)並びに公共政策学教育部長(大学院第一部)の列席のもと、藤井総長から令和2年度入学者に対して歓迎の式辞が述べられました。また、インターネットを通じてライブ配信された学部第二部、大学院第一部では、それぞれ入学生総代(教養学部文科一類 小林 一也(こばやし かずや)さん、公共政策学教育部 尾崎 雄太(おさき ゆうた)さん)が代表して宣誓を述べました。それぞれのライブ配信は、令和2年度入学者とご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。

学部入学者向け総長式辞

令和2年度入学者のみなさん、はじめまして、今年度、第31代東京大学総長に就任した藤井です。

去年は、COVID-19の急速な拡大によって、楽しみにしていた入学式も中止となり、授業もほぼオンラインで開講されるというかつてない事態となりました。この困難な状況への対応の中で、前期課程におけるオンラインでの定期試験の実施など、新しい試みが重ねられ、東京大学にとって貴重な経験となりました。みなさんには、授業はもとより、キャン

パスへの立ち入り、図書館の利用、運動部やサークルといった課外活動など、多くの制限に協力していただきました。キャンパスで新しい友人を作る機会が得られず、オンライン授業に孤独を感じ、大学生活の将来に不安を感じた人もいるでしょう。みなさんの不安と不便をいくらかでも解消できるよう、できるだけの措置をとり、各施設でケアに努めましたが、いたらないところもあったと思います。にもかかわらず、東京大学が教育と研究を止めずに前に進めたのは、みなさんの協力があつたからです。ほんとうにありがとうご



総長

藤井輝夫

ぎいます。

新型コロナウイルスについては、感染力の高い変異ウイルスへの置き換わりが続き、感染拡大の制御が難しい状況が続いています。4月の終わりに実施を計画していたこの歓迎式典も、直前に延期を決断せざるを得ない事態となり、急なことでみなさんにはご迷惑をおかけすることになってしまいました。

この歓迎式典は、この一年、入学式に集えなかったことに始まり、勉学や研究や大学生生活のうえでも多くの困難を経験してきたみなさんに直接お会いして、その労をねぎらうとともに、東京大学の仲間として改めて歓迎の気持ちを表したいと思い、開催するものです。その意味では、2ヶ月ほどの延期を経て、本日改めて開催できることを大変嬉しく思います。

すでに公表していますとおり、私自身、この4月に総長に就任して間もなく新型コロナウイルスに感染してしまいました。どれだけ気を付けていても、感染のリスクは身近にあるのだということを痛感しました。約2週間の入院療養の間、昼夜を問わず患者に対応し、健康観察や治療に取り組む方々を目の当たりにし、世界中でいまでも続いている保健・医療関係者の格闘にあらためて思いをいたしました。この災厄の克服に力を尽くしているすべての方々に、心から敬意と感謝の意を表したいと思います。

さて、コロナ禍の状況は、私たちに新たな困難だけでなく、大学で学ぶことの意味を教えてくれているようにも思います。いま、世界の分断はさらに顕在化し、社会の在り方は急速に変化しつつあります。これまででない、新たな人類史的課題が生じてきているといえます。

私は、こうした状況にあってこそ、大学の存在価値はより大きくなるものと考えています。なぜなら、いま最も必要なのは、直面する困難を乗り越える道を見出すことだからです。それぞれの専門領域において蓄積されてきた知識や、経験から生みだされたさまざまな知見や知恵を編み合わせて、新たな道標となる「知」を創出する。私は総長として、こ

の東京大学を、そのような多様な「知」が生まれ、交じり合い、新たな実を結ぶような活動の場にしたいと考えています。

とはいえ、言うは易し、行うは難しです。実際のところ、同じ専門分野の者どうしでも、すぐに話を通じるとは限りません。分野が異なれば、なおさらです。学生のみなさんにとっても同じで、せっかく大学に入ったにもかかわらず、同じクラスや学科の仲間以外とはほとんど語り合わないまま卒業してしまう、ということにもなりかねません。

いろいろな人が集う東京大学という場で、何よりもまず大切なことは「対話」であろうと思います。本来的な対話の試みとはいったいどのようなものか、そこにはどのような可能性があるのか。ここでは私自身の研究に関連した、知の交流の事例から、お話ししたいと思います。

私は、東京大学工学部の船舶工学科を卒業し、大学院生時代は海中ロボットを研究しました。その後、本学の「生産技術研究所」で自分の研究室を持つてからは、マイクロ流体デバイスを使って新しいセンサを作り、たとえば深海を詳しく調査する方法の研究を進めてきました。2015年にこの研究所の所長に就任した頃、デジタル革新によって産業構造が大きく変化するなかで、「ものづくり」の未来像を改めて描きなおすべきである、と考えるにいたりしました。

工学の最先端の研究を実社会と結び付けるためには、その研究から得られる新しい技術をどのように活かすべきか、ユーザーは何を求めているか、さらにそもそも何をつくるべきか等々を基本から問い直し、実社会を視野に入れてデザインしなおすアプローチが必要です。このため、2017年に「デザインラボ」を立ち上げました。

デザインラボのミッションは、最先端の研究や技術を、実用のアイデアにつなげることです。デザイナーたちは研究所内の研究室を訪ね、面白そうな研究の種を探して回りまわります。これはトレジャーハンティング、宝探しと呼ばれます。このとき、「ことば」が共通

でないがゆえに生じる「疑問」や「誤解」が、逆に宝物を見つけるうえで役に立つといいいます。作り手とはまったく異なる視点から対象を眺めることで、思いもよらないかたちで、新たな「問い」が立ち現れてくることがあるからです。

2018年、私の研究室でも、デザインラボとの対話を通じて、「OMNI」という革新的な海洋調査の在り方を提案しました。OMNIとは、Ocean Monitoring Network Initiativeの頭文字をとったものです。一般に海洋調査には多額の費用と長い期間が必要で、ごく限られた専門家たちだけの世界のように見られてきました。OMNIは、そうした現状を変えようとするプロジェクトです。海は本来、誰に対しても開かれていますので、低コストで自由度の高い海洋調査のツールが用意できれば、誰でも簡単に海のデータをとることができる、それを皆で共有するような仕組みができないか、と考えたわけです。

私たちが開発した観測機器は、ちょうどサッカーボールくらいの大きさです。今日はMark III、三つ目のバージョンをここに持ってきました。材料は100円ショップや秋葉原の電気街などで手に入り、誰でも簡単に組み立てることができます。手作りのこの浮力体の中に、緯度経度を与えるGPSやバッテリーが入っており、トップにはソーラーパネルがあり、この棒の先端のセンサで水温や塩分濃度などのデータを得ることができます。データはリアルタイムでサーバーに送られ、ウェブ上で公開されます。

まさに、デザイナー、エンジニア、科学者の「対話」の産物ですが、さらにこの観測機器は、広く学外の人々との対話と連携を可能にしています。例えば中学生や高校生に学校でOMNIの活用法を考えてもらったこともあります。漁業者、釣り人やサーファーなど、海に関わる多くの人たちが、このシンプルな機器を対話のツールとして、自由な発想を語り合い、問いをぶつけ合い、響き合わせるすることができます。OMNIプロジェクトの発展から、思いもよらないイノベーションが生まれ、海と人との豊かな対話が広がっていくことを期待しています。

このように、広く深い海についての探索を進めようという試みにも、実は複数の意味での対話が関係しています。「対話」という概念には、単に向き合って会話をするという以上の意味がありそうですので、少し整理してみましょう。

「対話」には、大きく三つほどの意味が見いだせそうです。

第1の意味は、向かいあって話すことによって、ある問題に対する理解を深め、問いを共有し、解を探っていく。いわば、真理に到達するための対話です。OMNI Mark IIIを「作る」作業を進める上で、この意味での対話が重ねられたことは言うまでもありません。昨年度のオンライン授業の環境構築にあたり、みなさんと重ねた対話も、これでしょう。

オンライン授業の導入において大きな役割を果たしたのが、ポータルサイト utelecon への全学からの質問やフィードバックです。多くの声が寄せられることで、システムの弱点がわかり、新たな試みが生まれました。また、迅速な対応から信頼感が生まれ、不具合があったとしても互いの力で解決できる連帯感が生まれました。こうした経験を重ねて、授業はもとより、教養学部前期課程の定期試験をすべてオンラインで行なうという決断が可能になったのです。

しかしながら、多くの場合、みなが同じ方向を向いて目標を共有しているわけではありません。それなら、そこでは対話は生まれないのでしょうか。実は、解決を生み出すことだけが対話の目的ではありません。

対話の第2の意味は、共感的理解の構築です。すなわち答えを出すよりも、まず対話の相手を全体として受け止め、そこから自分に向けられた問いかかけを聞き取ることです。たとえば、みなさんのなかにも、オンライン授業に対応できるようになったけれど、それでは足りないと感じている人はいるでしょう。一方で、いや、オンラインで十分だ、かえって便利でよい、という人もいます。こうした意見の違いは、じつはどんな学生生活が望ましいのかという問いをめぐる価値観の

違いにも根ざしています。ネットなどでは、互いの価値観の直接的な対立がしばしば見られますが、言葉尻を捉えたやりとりで、対立が解消することはありません。まずは相手の声を全体として受け止め、信頼し、その問いかかけを共感的に理解すること。それが大事です。

とは言うものの、そのように理解することは簡単ではありません。そこで重要なのが第3の意味での対話です。相手が何を語っているのか、何を問うているのかよく理解できなくても、対話を続けるうちに、結果として意外なことが起こります。自分にはなかった新たな視点が、むしろ理解できない相手からもたらされるからです。先ほどお話ししたデザインラボで、「誤解」から新たな宝が生まれたのは、まさにその例でしょう。OMNIの観測機器の活用も、実はこうした意味での対話を期待していると言えるのかもしれません。観測機器を手にして海に入る人びとの動機はさまざまであり、必ずしもお互いに意図を共有しているわけではありません。しかし、各々がそれぞれの場で海を介した交流を楽しむことで、結果的に海についてより多くのデータが集まってくることになります。

この第3の「対話」は、「ポリフォニー」としての対話である、と考えることができます。ポリフォニーは、多声音楽と訳されます。単一の主旋律と伴奏からなるホモフォニーではなく、独立した旋律が複数あり、結果として一定の調和を見る音楽のことです。一致することを目指さない多様な声が響きあうことで、結果として何かが生み出されます。その前提には、他者のことはそう簡単には理解できないという認識があるとも言えます。

現代の世界では、共感にもつづいた理解などとても生まれそうにないと思うほど、社会の分断が顕在化しています。アメリカ大統領選挙をめぐる騒乱は記憶に新しいところですが、世界各国においてマイノリティに対するヘイトクライムをはじめ、耐えがたく殺伐とした空気が広がっています。地球上には70億人以上の人が暮らしていて、相互理解それ自体が、容易ではありません。しかし、声を聞くことから始めることはできます。自分が声を上げてそこに響き合わせることもできま

す。大切なのは、対話への試みをやめないことです。

昨年のSセメスターに行われたオンライン定期試験も、こうした考えのもとで設計されました。複数の方式があり、またマニュアルも複雑で、二度とやりたくないという声があったのも承知しています。ただ、学生・教員ともに多様な考え方があつた中で、試験をできるかぎり公正に、また特定の人に過度な負担がかからないように実施する。そのためにこそ、あのように複雑なシステムが生みだされたのだ、ということ伝えておきたいと思っています。そして最終的には、みなさん一人ひとりが協力してくださったからこそ、なんとか成績を出すところまで漕ぎつけたのだと考えています。

多様性を尊重して物事を進めるときには、想像以上に多くの困難が伴います。多くの声に対応しようとして、一人ひとりの負担が増えてしまうことは少なくありません。単純な方法をとることは、一時的にはとても楽です。しかし、ポリフォニーの実現と負担の軽減をいかに両立させるか。それは、大学で学ぶ者にとっての究極の課題だと考えています。なぜならば、多様な声による多様な問いこそが大学の活力となるからです。このような考え方を大事にしなが、今後もみなさんとともに、よりよい大学を作っていきたいと思っています。

これは広く社会全体に、必要な考え方もあります。COVID-19との闘いは、私たちの生活のさまざまな側面に、かつてないほど多くの制限を課しています。「緊急事態弱者」ともいうべき、想定外の困難な状況に陥る人びとも見られます。そうした人びとが孤立し、取りのこされることがないよう、配慮し、考える、そのような実践が求められています。そこでも「対話」が必要なのです。

さて、ここでみなさんにお話ししなければならぬことがあります。5月15日と16日に開催が予定されていた五月祭の延期についてです。その公表が開催直前の5月10日になってしまい、大変ご迷惑をおかけしました。

当時の東京の感染状況を振り返ると、5月6日付の東京都のモニタリング分析では、若年層を中心とした流行が続くなか、感染力の強い変異ウイルス（N501Y）に急速に置き換わりつつあり、若年層の重症化も懸念されると報告されています。実際に、5月6日から8日のたった3日間に、東京都の新規感染者数は約2倍に急増し、1,000人を超えてしまいました。このことは、危機管理をなう大学本部にとって大きな脅威となりました。

一方、本学では、5月7日に緊急事態宣言が延長されたことを受け、大学の感染対策レベルを「準1」で継続することを決定していました。一部で対面授業を継続するなかで、本学でも感染者が増え、警戒を強めなければならない状況にもありました。そのような状況のもと、大学本部では五月祭の企画が「準1」の範囲として許容できるかどうかを検討しました。みなさんも十分に考慮して下さったと思いますが、過去の学内での感染事例を踏まえると、感染拡大を防ぎきれない企画があったことや、仮に五月祭を完全にオンライン開催に切り替えたとしても、準備や活動を自宅やレンタルスペースなどに集まって継続すれば、さらに感染が拡大することが危惧されました。

さらに、変異ウイルスが先行して流行した大阪府で、かつてない医療逼迫を経験したことから、当時、首都圏の人々は今後の急激な感染拡大を懸念していました。五月祭は、大学と社会との対話の場でもあります。だからこそ、そのような状況において学園祭を開催することが社会一般から見てどのように判断されるかという観点も考慮しました。その結果、主催者、参加者共に安心できるような五月祭を開催するには、十分な検討の時間が必要と判断し、当初の日程での開催を見送る決断に至りました。

決断がぎりぎりになってしまったことについては、先ほど述べたとおりお詫びしたいと思いますが、こと公衆衛生に関わる緊急の決断プロセスにおいては、その緊急性ゆえに「対話」を難しくする要素をはらむことがあります。学内の専門家とも検討を重ねた結果、大学の最終責任者として今回の決断をせざるを

得なかったことも同時にご理解いただければと思います。

これを機に、五月祭がポストコロナ社会におけるより濃密な「対話の場」として発展的に開催されることを願い、その実現に向けて学内での対話にも力を注いでいきたいと考えています。

昨年度はみなさんにとって、つらいことが多かったと思います。後半から一部、対面での授業や活動がはじまり、直接顔を合わせることができた時のみなさんの笑顔をよく覚えています。私たちも対面の割合を増やす方向で進めています。ただ、しばらくはオンラインとの併用もやむを得ないところかと思えます。そういう状況だからこそ、今後も対話をいっそう重視したいと考えています。受講環境の問題はもちろん、心に不安や落ち込みを感じた時は、いつでも相談してください。

今年度の後半には、後期課程での専門分野に漕ぎ出すことになります。自らの関心に応じたゼミでの議論、実験室での試行錯誤、多くの文献や資料との格闘、フィールドで汗を流しながらの調査等々、これまで以上に多彩な学びの機会と、多くの新たな出会いと問い

が、みなさんを待っています。活動の制限を余儀なくされる局面が続くとは思いますが、是非、新しい発想で工夫しながら、目的を達成できる方法を見出す、ということをお心掛けていただきたく思います。そうした新たな発想は、往々にして、周りの教員や仲間たちとの対話の中で生まれてくるものです。

最後に一つ。オンライン環境では、ともすれば聞きたい声だけを選び取って聞くことができてしまいます。だからこそ意識的に、共に学ぶ仲間の声に耳を傾け、世界の多様な声を、たとえ理解できなくても、聞き続けてください。そしてみなさんもぜひ声を出して、話しかけ、問いかけてみてください。この一年を経験したみなさんだからこそ、語れることがあるはずです。

改めて、この一年のみなさんの努力と協力に感謝します。そして、一年遅くなりましたが、みなさんの入学を、一緒に祝いたいと思います。

ともにこれからの東京大学をつくっていきましょう。



歓迎式典の参加希望者には事前に新型コロナウイルスの検査キットが送付され、検査で問題がないと判断された人だけが入場できました。入口には使用済検査キットの回収ボックスやサーモグラフィー、手指の消毒器が設置され、会場の座席には隣の人と十分な距離を保つように白いテープが貼られました。

入学生総代宣誓

春も終わり、少しずつ夏の暑さを感じられるようになりつつある今日という日に、令和2年度入学生歓迎式典に参加することができ、心より嬉しく思います。

度重なる緊急事態宣言とその延長に示されるように、新型コロナウイルスの感染拡大状況が予断を許さない中、我々のためにこのような式を挙げていただき、誠にありがとうございます。また、私たちが東京大学に入学するために、そして東京大学でこの1年間を過ごすために必要不可欠な役割を果たしてくださった、家族をはじめとするすべての方々に、この場をお借りして、改めて感謝の意を申し上げます。

さて、一昨年の12月ごろから少しずつ拡大を始めていた新型コロナウイルスの流行は、当初の一部の楽観的な予想を裏切り、長期化の様相を呈しています。医療従事者の方を始めとする多くの方々の奮闘にも拘わらず、未だ、感染拡大終息の目途は見えていない状況です。旅行産業・飲食産業を含む社会の多くの範囲が多大な影響を受け、一度延期された東京オリンピック・パラリンピックさえも、その開催の可否を今問われています。

一方で、我々大学生の生活もその例に漏れ

ることはありませんでした。オンライン授業・オンライン試験が主体となり、サークルや部活動も、直接顔を合わせる事のないオンラインでの活動が中心となりました。我々は、従前とは全く異なる環境の中で生活し、勉強し、そして、何よりも人間関係を構築することを求められてきました。

このように、新型コロナウイルスの流行によって、現在に至るまで当たり前とされていたこと、我々が当たり前だと思っていたことが根底から覆されてしまっていると言えます。未来像を明晰に描くことが困難な不確実性の時代において、我々には、この不確実性を孕む社会の抱える諸問題に立ち向かう力を身につけることが求められています。

東京大学は、重厚かつ濃密な歴史を有し、我々の能力を開花させてくれる可能性を秘めた環境です。1年前の春、その東京大学の門をくぐって広漠たる知の世界に入門した我々は、1年間、新しい環境の下で学習を行ってきました。今後とも弛むことなく、藤井総長を初めとする教職員の方々、また諸先輩方の温かいご指導や、同級生との切磋琢磨を通し、社会の問題解決に自信を持って取り組む力を身につけるべく勉学に励む所存であります。



教養学部文科一類

小林一也さん

未熟ではありますが、伝統ある東京大学の構成員としての矜持を胸に、同時にあらゆることに対する謙虚な思いを忘れず、また、他者のために尽くすという至高の目的のもとで共同することを通じて、我々一人一人が、社会において独立した、代替不可能な役割を、制約を加えられることなく、自由に果たすことのできる存在となるべく研鑽に励むことをここに誓い、令和2年度入学生の挨拶とさせていただきます。

大学院入学者向け総長式辞

令和2年度入学者のみなさん、今年度、総長に就任した藤井です。

みなさんは、新型コロナウイルス感染症の急速な拡大によって、昨年度の大学院の入学式が中止されたことに始まり、大学院での生活においても日常生活においても多くの困難を経験してきたと思います。そうしたみなさんに、ここで直接お会いして、これまでの労をねぎらうとともに、東京大学の仲間として歓迎の気持ちを伝える機会を持たれたことを大変嬉しく思います。

日本のみならず世界全体が、かつてない危機的な事態となり、大学もまた授業のオンライン化はもとより、キャンパスへの立ち入りやフィールド活動について多くの制限をみな

さんをお願いしてきました。キャンパスで新しい友人を作る機会が得られず、大学院生として学び、研究することの将来に不安を感じた方もいるでしょう。大学院において海外でのさまざまな活動を夢見ていた人にとっては、大変もどかしい状況であると思います。

こうした制限が必要な緊急事態は、今年度になってもなお続いています。4月の終わりに計画をしていたこの歓迎式典についても、直前になって延期を決断せざるを得ない事態となり、みなさんにはご迷惑をおかけしましたが、残念ながら、主に二つの理由から延期しました。第一に、すべての講義や演習がオンラインであった昨年の9月と異な

り、今年度は、対面での講義を一部取り入れており、その貴重な学内での教育の機会を極力守らなければならなかったからです。第二に、緊急事態宣言が発出された中で、感染拡大防止に努めるという社会の一員としての責任を果たす必要があるためです。秋に延期して、安全・安心に開催できるよう、いま検討が進められているところです。

すでに公表していますとおり、私自身、この4月に総長に就任して間もなく新型コロナウイルスに感染し、約2週間の入院療養をしました。どれだけ気を付けていても、感染のリスクは身近にあるのだということを痛感しました。最近では感染力の強い変異ウイルスへの置き換わりが続き、感染拡大の制御が難しい状況が続いています。昼夜を問わず患

者に対応し、健康観察や治療に取り組む保健・医療関係者をはじめ、この災厄の克服に力を尽くしているすべての方々に、改めて敬意と感謝の意を表したいと思います。

さて、コロナ禍の状況は、私たちに新たな困難だけでなく、大学で学ぶことの意味を教えてくれているようにも思います。いま、地球温暖化や海洋汚染、差別や不平等など、グローバルな問題を前に、世界の分断はさらに顕在化し、社会の在り方は急速に変化しつつあります。

私は、こうした状況のなかにおいてこそ、大学の存在価値はより大きくなる、と考えています。なぜなら、いま最も必要なのは、その困難をともに乗り越える道を見出すことだからです。それぞれの専門領域において蓄積されてきた知識や、経験から生みだされたさまざまな知見や知恵を組み合わせ、新たな道標となる「知」を創出する。私は総長として、この東京大学を、そのような多様な「知」が生まれ、交じり合い、新たな実を結ぶような活動の場にしたいと考えています。この一年間の苦しい経験を経て、私たちは新たな「知」のスキルを身につけつつあります。実際、教育や研究におけるデジタルトランスフォーメーションへのうねりも加速しました。

とはいえ、スキルや技術革新だけで、すべてが解決するわけではありません。いろいろな人が集う場で、何よりもまず大切なことは「対話」であろうと思います。東京大学には、異なる国や地域の人たち、異なる考え方やバックグラウンドを持つ人たちが集まり、互いに出会う機会があります。そうした機会を、よりよい世界を生み出すために生かせるかどうかは、われわれ次第です。

例えば、デジタルトランスフォーメーションはビッグデータ社会への変革でもあるわけですが、サイバー空間を飛び交うようになった多くの情報が、自動的に、地球上の人びとの対話を促して、互いを理解する方向に導いてくれるというわけではありません。「フェイクニュース」がもたらす混乱や、「炎上」による分断・対立、条件反射的な「いいね!」の副作用など、気がかりな傾向も

拡大しています。

新型コロナウイルスのワクチン接種に関しても、真偽のほどが不明な多くの情報が出回っています。多くの情報に囲まれた社会であるからこそ、私たちは、無批判に情報を受け入れるのではなく、その正確さや信頼性を常に考えなければなりません。東京大学としても、できる限り正確な情報を積極的に公開することに努めますが、多くの情報があふれかえるなかで、やはりみなさんたち自身による取捨選択をしていただく必要があります。信頼できる情報かどうかを吟味し、選んで発信する力が不可欠です。

だからこそ、いま、多様性を踏まえた対話が大切なのです。もし、似たような背景を持ち、同じような考え方の人たちだけが意見を交換し、確認しあうようになると、しばしば偏った情報のみが集まり、それらを信じてしまうことになりがちです。データや情報を活用したより良い社会を作るためには、多様な考え方、多様な背景を持った人たちの間の対話が重要な役割を果たすことを知っていたきたいと思います。もちろん、東京大学としても、これまで以上に多様性を重視する必要があると考えています。

さて今日は歓迎の集まりですので、30年近く前に大学院で学んだ先輩として、私がみなさんに大切にしてもらいたいことについて、お話ししたいと思います。それは、未知なるものへの好奇心、新しいものを創り出そうとする創造性、そして、お互いを尊重して協力する協働性です。この3つは、じつは密接にからみあっています。

私は今年の大学院入学式式辞で、探査機「はやぶさ2」が、昨年12月、小惑星リュウグウから砂や小石などのサンプルを地球に届けたプロジェクトを取りあげました。

初代の「はやぶさ」は、その10年前の2010年に人類史上はじめて、小惑星「イトカワ」からのサンプルの持ち帰りに成功しました。このはやぶさ1号機と2号機に至る我が国の宇宙開発が、東京大学の生産技術研究所で始まったということ、みなさんはご

存じでしょうか。日本初の観測用ロケット開発のプロジェクトを率いたリーダーは、生産技術研究所の糸川英夫先生でした。小惑星「イトカワ」は、先生の名前にちなんで命名されたものです。

糸川先生は、1950年代半ばからロケットの研究に携わっていきます。しかし、糸川先生がロケット開発に取り組み始めた当時、国内にロケットを作る技術はありませんでした。つまり、このプロジェクトは「何も無いところから短期間で宇宙に到達するロケットを開発しよう」という、無謀ともいえる挑戦でした。

地球からの重力に逆らって、数十キロメートルの高さまで大型のロケットを飛ばすには、大きな推進力を発生させるかなりの量の燃料が必要です。しかも、推進力を制御するためには、固体燃料と酸化剤を練り混ぜたものを、適切な形状と大きさに仕上げなければなりません。ところが、当時、日本国内でそのような大型燃料を調達することは、極めて困難でした。

ロケットは大きいもの、という常識からすると、大型燃料なしでは研究が始まりません。しかし、糸川先生は発想を逆転させ、少量の火薬で飛べる超小型のロケットを作ることになりました。長さ23cm、重さ約200gの「ペンシルロケット」です。いま、手元に、そのレプリカがあります。みなさんのロケットのイメージからすれば、ほんとうに小さなものでしょう。たとえ



どんなに小さくとも、ロケットの原理で実際に物体を飛行させることが何より大切だと考えたわけです。実際、このペンシルロケットを使った実験によって、研究グループは貴重な経験とデータの蓄積を得ることができ、その後の研究は大きく進むこととなります。

この糸川先生のモットーが、「前例がないからやってみよう」でした。それは、常識としての前例にとらわれない発想であり、これまでの考え方を変えてみよう、という精神で

す。これがまさに不可能を可能にし、創造性をもたらします。それはまさしく未知への好奇心に根ざしたものだともいえるでしょう。人間はだれしも不安に思うと「教科書」や「前例」を探したくなります。あるいは、「流行」を追いかけ「最新」を真似ようとし、しかし、それを続けているだけでは、新しいなにかを創り出すことはできません。不可能を可能に変えるためには、「前例がないから尻込みする」のではなく、「前例がないからやってみよう」という姿勢が大切です。ぜひここで、みなさんに届けたい言葉です。

もう一つ、この事例からみなさんに考えていただきたいことは、ロケット開発が多くのひとを巻き込んだ、総合的なプロジェクトであった、ということです。飛翔体としての設計から姿勢制御、先に述べた燃料技術、さらには計測技術など、さまざまな領域の専門性を必要とするものでした。

たとえばペンシルロケットの実験では、障子紙を一定間隔に並べて、水平に発射させたロケットを貫通させ、高速度カメラによる撮影結果と合わせて速度変化や軌道などを計測しました。現場での創意工夫の積み重ねで生まれた手法で、生産技術研究所には、いまま映像技術室という専門の部署があります。このように総合的なプロジェクトにおいては、それぞれの専門家が自らの最先端の知恵や技術を投入し、全体に貢献する、その協働性が極めて重要です。

現在各国で進められている新型コロナウイルスのワクチン接種も、じつは単独の専門性では到底実現できない、まさに総合的なプロジェクトです。中国・武漢における新型コロナウイルスの発生がWHOに報告されたのが2019年12月31日でした。それからわずか10日後に、ウイルスの塩基配列情報が中国の研究者によって国際学術誌に発表され、速やかに国際公共データベースで開示されました。世界中の研究者が、この公開された配列情報を使って新型コロナウイルスの研究に着手することができました。その成果のひとつが、僅か1年弱という驚異的な期間で開発された「メッセンジャーRNAワクチン」です。

じつはこのワクチンの開発にも、RNAをめぐる常識を変える逆転の発想や、異なる立場からの研究の対話と協創が関わっています。

RNAのワクチンへの利用には、本学薬学系研究科博士課程を修了した古市泰宏博士と本学名誉教授の三浦謙一郎先生らが1974年に発見した「ウイルスRNAのヌクレオシド修飾」と「RNAのキャップ構造」が必要不可欠な知見となっています。その30年後の2005年に、ペンシルバニア大学のカタリン・カリコ博士、ドリュエ・ワイズマン教授らのグループが、メッセンジャーRNAのヌクレオシド修飾が宿主の自然免疫反応を抑制できることを発見し、メッセンジャーRNAワクチン開発につながりました。今回のワクチン開発に、古市博士やカリコ博士の研究のように、社会の要請やトレンドに流されない、研究者の内発的な好奇心に基づいた基礎研究の成果が深くかかわっていることを忘れてはならないと思います。

その一方で、がん治療法の開発にメッセンジャーRNAを応用していたバイオテクノロジー企業、Zika熱を引き起こすRNAウイルスのワクチン開発をその後も続けていたペンシルベニア大学など、複数のグループがパンデミック克服という公共の利益を共に目指し、競って取り組んだことも、今回の開発の大きな推進力でした。さらにはSARS、MERSといった近縁コロナウイルス感染症に対する研究の蓄積が加わり、今回の驚くべきスピードで新規ワクチン開発が可能になったわけです。この事例は、基盤となる情報の公開活用、異なる視点やアプローチの重要性、多様な研究者による大きな方向性の共有など、学知が世界に貢献するための多くのヒントを与えてくれています。

しかしながら、ワクチンは開発されただけで終わりではありません。いまでは国内でも複数の経路でロジスティクスが整い、約1億人分に届くようになつてない規模でのワクチンの接種が進みつつあります。本学でも、7月からワクチン接種を行うための準備を進めているところです。この一連の取り組みが速やかに進められ、一日も早くCOVID-19の拡大が収束することを期待していますが、世

界中の人びとに新型コロナウイルスのワクチン接種を行うことは、容易ではありません。

まずワクチンを、世界のあらゆる人々に公平に届ける必要があります。このためワクチンを複数国で共同購入し、公平に分配するための「コバックス・ファシリティ (COVAX Facility)」という国際的な枠組みがつくられています。日本もこの枠組みに参加するとともに、独自に途上国の接種支援も行っています。それは、科学者がグローバルな視野に立ち、社会的責任を果たすことでもあるのです。立場の異なる様々な人々が互いを尊重して協働すれば、こうした地球規模のプロジェクトであっても円滑に進めることができるものと思います。

最初に私は、みなさんに大切にしてもらいたいのは、未知への好奇心、新しいものを創り出そうという創造性、そして、お互いを尊重して協力する協働性だといいました。みなさんは、現在、どのような研究に取り組んでおられるでしょうか。

昔の話になりますが、私自身は、電力や信号等を供給するケーブルでつながっていない無人の潜水艇の開発という研究テーマに興味があり、船舶工学専攻の修士課程でこの研究に取り組みました。主としてその制御系の研究を進めていましたが、ある時点から無人潜水艇は「ロボット」であり、その制御系は「ロボットの知能」ではないか、と考えるようになりました。このことを指導教員であった浦環（うら たまき）先生にお話ししたところ、無人潜水艇を「海中ロボット」と呼び、制御系のケーブルをもたない無人の潜水艇は「自律海中ロボット」と呼ぼうということになりました。

そして、制御系の研究を進めるために、当時本学の工学部計数工学科にいらした甘利俊一先生が書かれた「神経回路網の数理」という教科書を浦環先生と一緒に輪講しました。この輪講を経て、現在、AIあるいは機械学習で注目を集めているニューラルネットワークを用いて海中ロボットを制御するという研究を、修士論文としてまとめることになりました。

これは私の学生時代の、ほんの一例に過ぎません。みなさんも是非、自らのアンテナを広げ、興味の対象を自由に探し、多くのひとと関わりあってみてください。きっと先輩たちとも先生方とも異なる視点が見いだせるはず。みなさんひとりひとりの興味が新しい学問に結び付いていけば、大学全体として、あるいは社会全体として、彩り豊かで重層的な学知を生み出すことにつながります。また、異なる分野や背景を有する研究者同士が対話し、議論を掘り下げていくことは、より質の高いアイデアや、共感性の高い方策を見出す上でも重要なことです。

自由に興味の幅を広げていく時、ひとつ心に留めていただきたいことがあります。それは自由があるからといって何をやってもい

いわけではない、ということです。すなわち自由には責任が伴うことも是非知っていたべきだと思います。純粹に知りたいたいと思っ取り組んだこと、あるいは努力の末に開発に成功したことが本当に社会のためになるのか、あるいは、人類ひいては地球に対する脅威にならないか、だれかを傷つけてしまうことはないかなど、立ち止まってじっくりと考えることも必要です。そうした、いわば自分との対話も、科学にとってはたいへん重要な実践です。

倫理的に自らを律することは、学問の自由を享受し、新たな科学的な知見を生み出すものが負うべき社会的な責任の一環です。的確な自主規制を行うためには、その技術が社会に与える中長期的な影響に関する豊かな想像

力を持つことが不可欠です。そのためにも、一つの専門領域を深く学ぶ一方で、異なる分野の学知や文化、さらには芸術の営みなどにも触れてください。異なる分野の研究者と対話する力も求められるでしょう。東京大学はそのような場をみなさんに是非提供したいと考えています。

最後になりますが、みなさんが、「前例がないからやってみよう」という未知への好奇心、楽しみながら新しいことを作り上げる創造性、そして、異なる立場の人を尊重し、積極的に対話する協働性をもって、伸び伸びと活躍されることを期待します。

入学生総代宣誓

本日はこのような素晴らしい式典で、令和2年度入学生である私たちを大学の一員として改めて迎え入れてくださることに、心より感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の影響で、私たちの大学院生活は当初思い描いていたものとは大きく異なる形で始まりました。入学式は中止、突如始まったオンラインでの学習に戸惑い、新しいコミュニティに参加するのにも苦勞しました。

対面でコミュニケーションを取るのが難しい時代はまだしばらく続きそうですが、それでも私は学問の追究において人と人の交流が必要だと考えます。そこでこの場をお借りして、「学問と垣根」についてお話しさせて頂きたいと思います。私は学部時代に建築学を学んでいましたが、昨年からは公共政策学教育部に学びの場を移しました。このような選択をしたのは、分野の垣根を超えた学びが重要であると考えからです。

そもそも私が学んでいた建築学は、構造、材料、環境工学などの工学的側面、意匠などの芸術的側面、建築計画や法規などの社会的側面を持つ複合的な分野です。同様に公共政策学も、法学、政治学、経済学にまたがる学際的な分野です。

なぜこのような分野が必要となったのでし

ょうか？

私たちはよく文系や理系という非常に単純な分類で学問を語ることがあります。しかし実際の世界はより複雑で、簡単に線引きできるものではありません。

先人が蓄えた知恵を社会に還元していく上で、多方面から知を集結しなくては解決できない複合的な課題に直面したことが、これらの学問分野の発展の背景にあるのではないのでしょうか。

さて、学問分野の垣根を超えた協働によって新しい知が得られたように、グローバル化によってもたらされた自由な人・モノ・情報の行き来は、国境という垣根を越えた新たな出会いや創造をもたらししてきました。

しかし、新型コロナウイルス感染症の蔓延は、世の中の差別や偏見に一層拍車をかけているように感じられます。

もし私たちが社会の分断の傍観者に徹すれば、垣根を越えた交流によって得られる新たな学びは望めないでしょう。先人の積み上げた学知をさらに発展させ、その果実を社会に還元するためには、このような分断を乗り越える努力が求められているのではないのでしょうか。幸い、東京大学では様々なバックグラウンドを持つ人々が、日夜多彩な研究活動に励んでいます。この恵まれた学習環境を活か



公共政策学教育部

尾崎雄太さん

し、既存の垣根を超えて、学びを一層深化させることが、私たちの使命であると考えます。

よって私は令和2年度入学生を代表して宣誓します。先人の積み上げた学知に敬意を払い、学を志すものとしての矜持を常に忘れず、そのさらなる発展のために、あらゆる垣根を超えて真摯に学問に取り組むことをここに誓います。

最後に、私自身が誠実さと謙虚さを忘れず、自らの研鑽をたやさぬことを改めて誓い、宣誓の言葉の結びといたします。

教養教育の現場から

第46回

リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

「修辞学」に収まらない rhetoric を古典から探る

／初年次ゼミナール文科「政治レトリック」

文法、論理、そしてレトリック

——「レトリック」には美辞麗句で人を騙すようなイメージがあります。

「rhetoricは修辞学と訳されますが、私には適切とは思えません。古代ギリシアで生まれた rhetoricは、中世ヨーロッパで自由七科の一つとなり、リベラルアーツの伝統を培ってきました。grammar、logicとともに言語の三科を構成するのが rhetoricです。簡単に言えば、人間の言説（非言語も含む）の説得力＝影響力を分析する学問です。よって言葉に限らず、ビジュアルや音やにおいだって対象になります。都市をテキストとして解釈するとか、デモをビジュアルとして分析するとか、人が集まって作る真実性を分析する学問だとも言えましょう。アリストテレスは説得を行う手段を分析するのが rhetoricだと書いています。私の場合は、立憲主義や自由といった西欧の概念が近代の東アジアや日本に導入される際にその導入をどのように正当化する議論を行ってきたのかに興味を持ち、政治思想との関係で rhetoricを捉えてきました」

——明治時代、日本にない概念を表そうとして新語がたくさん生まれましたね。

「libertyから「自由」、constitutionから「憲法」、democracyから「民主主義」、stateから「国家」……。新しい概念の翻訳にはまさしく rhetoricが使われています。たとえば「国家」には「家」がつきますが、これは中国語でも同じ。日本も中国も家族制度と結びつけて stateを捉えましたが、元は統治する装置の印象を含む語で、西欧の人には違和感があるでしょう。この辺に rhetoricの妙があります」

日本では知られざる重要分野

「哲学が求める真実は、永遠的で、歴史性がなく、必然的なもの。一方、rhetoricが求める真実は、歴史性があり、偶然的で、人間的なものです。文章を読む際、logicの厳密さを見るのが哲学だとしたら、執筆時の歴史的背景や社会に与えた影響などまで見るのが rhetoric。日本では意識して研究する人が少ない rhetoricという重要な学問分野があることを伝えたいです」

——実際の授業はどのように？

「当番の学生がテキストを事前に読みこんできて解釈を報告した後に皆で議論します。プラトン、アリストテレスなどの古典を、日本語訳ではなく英語で読みます。もちろんプラトンの原典はギリシア

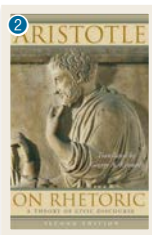
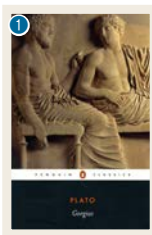


初年次教育部門講師
寺岡知紀

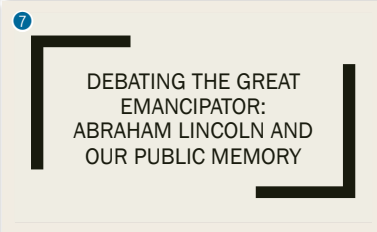
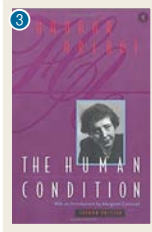
語ですが、西洋の学問は長い時間をかけて英語で研究されてきたので、英訳には解釈の厚みがあります。1年次から、たとえば「民主主義」ではなく democracyと捉えるのが重要です。この体験によって、学生には現在日本語として定着している西洋由来の言葉に多様な解釈の可能性を知ってほしいと思います」

——学生たちの反応はどうですか？

「最初はいきなり難しいテキストを読むことにとまどっていましたが、徐々に慣れてきました。しかし、テキストに沿った質問ができていないと感じることもあります。テキストはプラットフォームですから、引用して議論するのが大前提。昔のテキストに対して現代の価値観や自分の体験から一方的に判断をくだしてしまう学生が少なくありません。この表現は今では通じないなどと言うのは、書いた人に対してフェアじゃありません。なぜその時代にそう書く必要があったのか。作者はどんな影響を誰に与えたくて書いたのか。私の授業を通してそうした読み方を身につけてほしいと思います」



1 2 3 「政治レトリック」の授業で輪読のテキストとして使われているプラトン「Gorgias」、アリストテレス「On Rhetoric」、ハンナ・アーレント「The Human Condition」。4 5 6 7 学生たちの報告資料より。



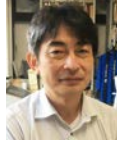
シリーズ

第36回

連携研究機構

放射線科学
連携研究機構

の巻

話／機構長
鍵裕之先生

放射線研究の魂を百年先につなぐ

——そもそも放射線科学とはどういうものですか。

「ラジオ・アイソトープ (RI: 放射性同位体) が崩壊する際に放出する粒子線や電磁波を放射線と呼びます。高いエネルギーを持って高速で飛ぶ α 線や β 線のような粒子線と、物質を電離 (イオン化) することができる γ 線やX線のような電磁波ですね。こうした放射線の特徴を理解し活用するための学術が放射線科学です」

「その成果としてよく知られるのは医学の分野、たとえばPET検査でしょう。体内の細胞はブドウ糖をエネルギーとして消費します。RIを組みこんだブドウ糖を投与し、体内から放出される放射線の様子から体の状態を調べる検査です。たとえば頭の働きが悪くなると脳にブドウ糖が集まらず、認知症の可能性などが疑われるわけです。がん細胞も盛んに分裂してエネルギーを消費するので、RIでマークすればがんの位置がわかる。位置を知らせるだけでなく、 α 線を出す薬剤を運んでがん細胞を壊す放射性医薬品も開発が始まっています。文化財などの年代測定や、地球深部の岩石や宇宙科学の研究にもRIが必須となっています」

——放射線には危険な印象もあるかと思いますが。

「維持管理が大変で、RIを扱える施設は学内外で減っています。しかし放射線科学は百年後も必要な分野であり、教育にも非常に重要です。そこで連携を強めて全体で維持していこうとの機運が高まり、アイソトープ総合センター長だった私がまとめ役となって、2月に機構が発足しました。現時点では、センターのほか、工学系、理学系、農学生命科学、薬学系、情報学環、総合研究博物館から教員33人が参画しています」

——日本と東大の放射線科学の現状はいかがですか。

「日本は安全のための規制が非常に厳しく、研究も応用も進めにくい部分は否めません。率直に言えば、東大は放射線科学の連携体制の構築で他大に先を越されていました。機構の発足を機に、総合大学の強みを活かした文理融合の取り組みを進めます」

「一つポイントとなるのは、2023年度に復興庁の予算で発足予定の福島国際教育研究拠点です。私たちは、災害・復興知連携研究機構とともに東大としてこの拠点に協力する組織となります。学外の提携先に福島大学や福島高専が入っているのはこの構想に沿ったもの。これまでもアイソトープ総合センターで福島の中学や高校への出前授業を行ってまいりましたし、連携部局の総合研究博物館が福島県楡葉町にモバイルミュージアムを開設したご縁もあります。福島の復興を支援するのはもちろんですが、福島の次代を担う子どもたちが放射線科学に親しんでくれることも期待しています」

あちこちそちこち
東京大学 第26回

本郷・駒場・柏以外の本学を現場の教職員が紹介

教育学部附属
中等教育学校の巻副校長
浅川俊彦

深い学びで豊かな市民性を育む



新宿副都心から2kmに緑豊かなキャンパスが広がる

中野区にある附属学校は、隣接していた海洋研究所の柏移転を機にグラウンドの全面人工芝化と新体育館建設を行い、都心部有数の広大な敷地を誇る中高一貫校として多くの小学生の憧れの場となっています。

もちろん魅力はキャンパスだけではなくありません。半世紀以上の歴史を持つ探究的な学びは、6年間の積み重ねのうえに卒業研究 (1万6千字以上) として結実し、なかには教育学部長から「院生レベル!」との評価をいただくような論文 (8万字) を書く各生徒もいます。

そうした学びが育む探究心は、課外活動の成果としても現れています。箱根駅伝を走るランナーや世界選手権に出場するスイマーも輩出し、生物部や計算機科学部も日本代表として国際大会に出場しています。

授業形態においては、生徒同士の学び合い、からだまるごとの関わり合いを重視した協働学習を、すべての教科のすべての授業に位置づけようと掲げてから15年、その足取りも確かなものになってきました。

こうした協働学習を通して市民性も育まれており、コロナ禍のもとで生徒会が呼びかけ、教員・保護者と構成する「三者協議会」で議論を深め、部活ごとの活動内容に即した感染予防マニュアルを作り、感染リスクを抑えた部活動や行事を実現しています。

近年では難関大への進学実績が向上するとともに「本当にやりたいこと」を重視する進路指導により、音楽・美術・演劇・ダンス・工芸・建築・農業・看護など、進路はたいへん多様化しています。なんとタカラジェンヌが3人も出ています。



1. 教室の机配置はコの字が基本。2. 部庁から体育祭も見えます。3. 空間UIを用いた学習を研究。4. JAXAの大会で日本代表となった計算機科学部の水口ケツ

www.hs.p.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト 第182回

RELAY COLUMN

理学部学務課教務チーム
学部担当係長

佐伯 勇

月食みえますか？



コロナ対策グッズ達と

「月食みえますか？」と聞いたら、「今日は曇ってるのと、月の位置が低くて。さっき一瞬、見えたんですけどね。今タワマンの後ろに隠れてますね」との返答。月食が見えると言われる某日の夕方、観測中と思われる学生？に、なんとなく声をかけた。厳しいね～と言うと、「でも僕は、あと2時間ががんばります！」との、すがすがしい決意表明。返りは暗いが、その表情？というか声のトーンは明るい。理学部には、こういう人が多い。知りたい事、教えた事、まっすぐで純粹、それでいて気さくで、発信力があり議論が大好き。理学に関わる人の特徴なのかも。私は教務を担当していて、学籍・成績・教室管理などの仕事をしているが、理学部の方々から刺激を受けることが非常に多い。理学部での業務が、後で振り返った時に「素晴らしい経験だった」と思えることを期待してやまない。追伸：昼休みに御殿下グラウンドでサッカーをしています。私をはじめ初心者もいます。



昼サッカー。興味ある方、声かけて下さい

得意ワザ：サッカー中の捻挫（ねんざ）
自分の性格：食べ過ぎ・飲み過ぎ
次回執筆者のご指名：小林岳明さん
次回執筆者との関係：昼サッカーの先輩
次回執筆者の紹介：サッカーの上手い優しい先輩

専門知と地域をつなぐ架け橋に

FSレポート!

第13回

教育学部3年
人文社会系研究科博士課程1年

西森 優
鎌田 寧々

能登と学生を繋いだ「あえのこと配信」

私たち*は、能登町山口集落の「コアなファン」を増やそうというテーマで活動を行いました。能登町山口は、平成27年度時点で人口103人の小さな集落です。高齢化率が46.6%と高く、高齢化に伴う離農者の増加が喫緊の課題となっています。

町役場と集落、そして我々学生とで関係人口創出のための方法を探る中で、集落と学生をオンラインでつなぎ、「あえのこと」と呼ばれる神事を見学するという企画が生まれました。集落からは事前に山菜や米を送っていただいております、これを味わいながらのオンライン食事も見学後に行われました。この交流をきっかけに、「あえのこと」を学生以外にも配信するというイベントが企画されました。

交流会の様子や感想

入念な準備を重ね、遂に2021年2月9日、集落外へ向けたオンライン「あえのこと」配信が行われ、事前に日本全国か



リハーサルでの様子

らSNSで募った参加者30名弱が集まりました。神事の配信後には懇談会も行い、町おこしや農業に関心のある参加者と直接交流することができました。今回の活動において、集落側で企画の運営の中心を担ったのは、昨年のFSを通して発足した「若者会」のメンバーです。このFSの活動が、その場限りのものではなく、今後も続いていくものであるということを集落内に示す上でも、意義のある活動だったと言えます。

能登の方々の反応

オンラインではあるものの、能登に興味を持つ学生との交流を喜んでもらえ、学生の意見を真摯に受け止め気づきに変えていただきました。プロ



能登の皆さん。早く現地でお会いしたい!

グラム終了後も、レシピと一緒に能登の食材を送ってくださるなどあたたかい交流を続けてくださっています。

活動を経て現在に活かされていること

オンラインの可能性と限界を体感できただけでなく、様々な意見や価値観を持つ人が暮らす中で、方向性を持って集落全体として存続のために行動していくことの難しさなども感じました。今後地域に関わる上で、その難しさやそこで暮らすリアルな生活感を前提として入り込める分、より当事者意識を持って入り込むことができそうだと感じています。

Twitter (https://twitter.com/noto_yamaguchi)

*メンバーは表記の2人のほか、池田佳玲奈（文三2年）、渡具知可偉（理一2年）、橋元菜摘（農4年）の計5人

インタープリターズ・第168回 バイブル

科学技術インタープリター養成部門
特任准教授

内田麻理香

科学エッセイの授業

—ロゲルギストをお手本に

ロゲルギストという名をご存じだろうか。ロゲルギストとは、1951年から1983年頃まで活動した物理学者の同人会である。計7名の物理学者が集まり、様々な日常現象をテーマに科学的視点から「放談」するための会合を定期的に行っていた。彼らはその結果をエッセイとしてまとめ、雑誌『自然』に連載した。もともとロゲルギストのメンバーは、ノバート・ウィナーの『サイバネティクス』を、自分たちなりに再解釈をして体系化するために研究会を開くつもりだったが、その会はいつの間にか気になるテーマについて語り合う飲み会となったという。ロゲルギストは、「服は交互に着た方が良いか否か」や「かき餅の穴の形」など、取るに足らないテーマについて、大まじめに物理学的考察を加え、それをエッセイにして発表した。私は、このロゲルギストの「グループで放談し、それを踏まえてエッセイを書く」という活動を再現すべく、今年度のS semesterから新しい授業「科学技術表現論Ⅱ」を開講した。

さて、ロゲルギストのメンバーは友人同士で飲みながら議論していたが、私が再現しようとするのは授業の中である。初めて会う受講生同士で、しかもオンラインの授業だ。このような状況でぎっくばらんな放談が実現するのか、不安な要素は多々あったが、優秀な学生たちに助けられた。あるときの放談のテーマは、「チャーハンの作り方の正解」だった。バラバラのチャーハンを作るためのレシピは巷に数多くあるが、いったい何が正解なのか。そもそも、「バラバラ」とは何を指すのか……など、一見くだらなさそうだが、実に刺激的な議論が展開した。そして、学生たちが執筆したエッセイは、各々の個性が光る素晴らしいものだった。

もともと、書く能力の高い学生が集まっていると思う。そんな彼らに対し、私の授業で提供できたものは、せいぜい異なる環境にいる学生との出会いなのかもしれない。それでも、人の行動や思考は集団に影響を与えて集団からも影響を受けるという、「グループダイナミクス」の力は大きいと思うので、学生同士の放談によって彼らの思考がよりいっそう磨かれたのではないかと考える。そして、学生たちの執筆したエッセイもまた、そのエッセイの読者の思考に影響を与えるきっかけになると信じている。

科学技術インタープリター養成プログラム
science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp

ききんの「き」

寄附でつくる東大の未来

第28回

渉外部門 シニア・ディレクター

塚 飛鳥

生きた証を残す～遺贈寄附を知っていますか

今、コロナ禍で問合せが急速に増えている寄附があります。それは遺贈寄附。遺贈寄附とは、遺言等によって財産を寄附をすることです。自分の人生を振り返り、人生の最後を迎える準備を行う終活の一環として、遺贈を考える人が増えています。

今年5月に行った相続・遺言セミナーでは昨年の8倍近い250人以上の申込があり、また、昨年度までは年に数件だった問い合わせが今年に入って週1ペースで来ており、遺贈への関心の高まりを感じます。遺贈には、1) 相続税がかからない、2) 金額に制限はない、3) 自分の意思や生きた証を寄附を通じて残すことができるといったメリットがあります。

東京大学への遺贈の理由は、学生時代の思い出のある母校の発展に貢献したい、将来の日本と世界を担う学生を支援したい、科学技術研究の発展に役立ててほしい、昔、病院でお世話になった、安田講堂に銘板として名前を残したい、など様々です。死後も続く社会貢献の一つのかたち、それが遺贈です。

一方、遺贈は相続と関連するため、トラブルの起きやすい分野でもあります。遺贈を行うにあたっては、1) 寄附先を探し、生前に遺贈についてコミュニケーションを行っておくこと、2) ご家族への説明・理解を得ておくこと、3) できれば遺言書を生前に作成しておくこと、に留意することで、死後の不要なトラブルを避け、自分の希望通りに財産が活かされることに繋がります。

東京大学基金では、年に2度、専門家を招き、遺贈に関するセミナーと個別相談会を開催しております。またそれ以外でも、基金の遺贈担当窓口（電話：080-7517-8722）で随時相談を受け付けております。

遺贈による支援の結果をご報告すると、ご遺族の方から、「支援によって故人の遺志が未来に繋がっているのだと思うと、大切な人を亡くした気持ちが慰められる」といったお声もいただいております。

遺贈は人生最後の社会貢献であり、みなさまの思いに寄り添い、生きた証を遺すお手伝いをする事だと考えておりますので、ご興味を持たれた方は一度お問い合わせください。

イベント案内

第13回遺贈セミナー個別相談会（予定）

11月上旬 オンライン開催

参加無料 詳細は東京大学基金 web サイトより

東京大学基金事務局（本部渉外活動支援課）
kikin.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
6月11日	本部学生相談支援課	「東京大学知の創造的摩擦プロジェクト」～第31回交流会開催報告～
6月12日	本部広報課	根岸英一先生の訃報に接して (総長談話)
6月16日	広報戦略本部、社会科学研究所	データであぶり出す移民と日本社会の関係
6月17日	史料編纂所	国際研究集会「日本中世史データベースの国際比較」を開催
6月18日	総合文化研究科・教養学部	ライデン大学との国際交流協定締結と「小和田恒記念講座」開設について
6月27日	本部総務課	令和2年度東京大学入学者歓迎式典を挙行
6月28日	本部人事企画課	令和3年度名誉教授の称号授与
7月2日	未来ビジョン研究センター	東京大学とUNIDOが持続可能な産業化に向けて連携強化
7月2日	広報戦略本部、理学系研究科・理学部	星のかけらから太陽系の進化ストーリーを描く
7月6日	本部総務課	令和3年度秋季学位記授与式・卒業式について
7月6日	本部総務課	令和3年度秋季入学式について
7月9日	本部広報課	「男性の大学」からの脱却 ダイバーシティと東大 01 林香里理事・副学長の巻

退任の挨拶

6月に退任された理事の挨拶を掲載します。

大学経営の一端を担って

前理事

里見朋香

2018年4月から3年3か月、人事・労務担当理事として勤務させていただきました。最後の1年半は新型コロナウイルス対応に追われた日々でした。

折しも国立大学への国からの財政的支援が細り、産学協創や基金、大学債といった手法で、東大の知を社会に還元し社会と繋がることで財政基盤を強化していく時期と重なりました。人材確保においても、

国から給与と退職金が保障された範囲内でのやりくりでは、もはや拡張した大学の活動を支えられないことを痛感しました。国と大学の関係は今後どうあるべきなのかという重い宿題を背負って文部科学省に戻ることになります。五神前総長、藤井現総長はじめ皆様のご厚情に御礼申し上げます。引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

就任の挨拶

7月に就任された新理事の略歴と挨拶を掲載します。

今日より良い明日

このたび、理事を拝命し、組織、人事・労務、法務・コンプライアンス等を担当することとなりました。私の座右の銘は「人生二度なし」です。一度しかない、ただひとつの人生の中で、過去の先人達が長きにわたって受け継いできたものを少しでもより良いものにして未来の世代に残していくことが今を生きる者の役割であり、そのことで自分がこの世に存在し、社会のために仕事をするの意義付けができるものと考えております。その意味で、今、世界全体が持続可能な未来に向けて共通目標であるSDGsを掲げているという前向きな時代の中で仕事人生を過ごすことができる、ということはとても幸運なことと思います。SDGsの達成年が2030年に設定されている中、これ

からの10年間はSDGsの達成を目指すことはもちろん、その先の未来に対してあるべき姿を提示していく期間です。そのことを、我が国を代表する本学において、優秀な教職員の皆様方とともに目指していけるのであれば、これ以上に光栄なことはありません。本学に赴任し、藤井総長の下で本学がSDGsの達成に貢献するべく試みていることを知り、非常に嬉しく思いました。そこにおいて、2030年の先の「ポストSDGs」の未来に東大の旗を立てることができるよう、努めてまいりたいと思います。もとより微力ですが、より良い明日のために、また、母校のために少しでもお役に立てることができればと思います。皆様からのご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。



理事

今泉柔剛

IMAIZUMI Jugo

平成6年3月 本学文学部卒業
 平成6年4月 文部省入省 (大学課)
 平成10年1月 外務省 (在トルコ日本国大使館二等書記官)
 平成19年7月 文部科学省 (国立大学法人支援課課長補佐)
 平成20年8月 文部科学省 (大学改革推進室長)
 平成22年3月 外務省 (OECD日本政府代表部参事官)
 平成25年3月 文部科学省 (大学設置室長)
 平成26年7月 文部科学省 (大臣秘書官)
 平成29年7月 (独)日本スポーツ振興センター (理事・新国立競技場設置本部長)
 令和2年10月 スポーツ庁 (政策課長)
 専門分野: 教育行政及びスポーツ行政
 趣味: スポーツ、旅行



CLOSE UP 国連工業開発機関と国際交流協定を締結 (未来ビジョン研究センター)



協定書にサインする藤井総長とリー・ヨン UNIDO 事務局長

6月28日、東京大学と国連工業開発機関 (UNIDO) は、革新的な技術や新たなビジネスモデル・制度的枠組みを探索することを目的とした国際交流協定 (Memorandum of Understanding) を締結しました。

未来ビジョン研究センターと関係部局は、2016年の海洋アライアンス (現・連携研究機構) による大学院生のインターンシップ派遣から始まったUNIDOとの協力が、最近では農学生命科学研究科による海洋プラスチックごみ削減に向けた共同プロジェクトが実施

されているなど、着実に拡がりを見せている背景から、今回の協定締結によって、異なる産業分野におけるUNIDOとの連携を促進し、東京大学が推進する未来社会協創推進本部 (Future Society Initiative) の取組みへの更なる貢献を目指します。

今回の協定では、共同プロジェクトのテーマとして、未来の製造業・産業・社会、デジタル化/第四次産業革命、海洋プラスチックごみ、循環型経済、カーボンニュートラル等が挙げられています。

コロナ禍 vs 東大 Now 新型コロナウイルス情報WG発

第8回/コロナ禍下の授業グッドプラクティス総長表彰

7月、昨春から始まったコロナ禍下での3回目のセメスターが終わろうとしています。この間、全授業のオンライン化から始めて、対面授業の部分再開、ハイブリッド授業の展開と、学びの継続と研究の推進のための挑戦が続けられてきました。特に課題と目されたのは、学生の不安の解消と双方向性の実現です。全学の教員がこの課題に取り組み、さまざまな工夫と成果が生み出されました。

そこで、今年3月、2020年度S・Aセメスターを振り返って、当時の五神真総長から、オンライン授業・ハイブリッド授業のグッドプラクティス総長表彰が発表されました。その数、実に477名。対象には非常勤講師の先

生方も含まれ、教員自身からの応募のほか、学生アンケートで評価の高かった授業、オンライン授業実施に当たり特に顕著な貢献をした者、が選定されました。

その一人、先端科学技術研究センターの稲見昌彦先生にお話を伺いました。Sセメスターに開講した大学院科目「人工現実感特論」では、ClusterというバーチャルSNSを用いてバーチャル安田講堂前広場で講義し、Comment Screenというアプリを使って匿名で質問やフィードバックをしました。これらのツールを用いることで、教室に集まらない学生たちが友人の存在を感じながら受講できたことや、普段の対面講義ではおとなしい学

バーチャル安田講堂で講義を受けるアバター学生たち (稲見教授提供)



生が活発に発言するようになったことは予想以上の効果だったといえます。教員にとっても、学生からのリアルタイムの反応は、遠隔講義に手応えを感じさせてくれました。

グッドプラクティスのいくつかはオンライン授業のためのポータルサイトutelecon (<https://utelecon.adm.u-tokyo.ac.jp/>) で共有されているので、ぜひご覧ください。(杉山清彦/総合文化研究科・広報室副室長)

根岸英一先生の訃報に接して

本学の卒業生、名誉博士であり、2010年ノーベル化学賞受賞者である根岸英一先生の突然の訃報に接し、深い哀悼の意を表します。根岸先生は長年にわたり優れたご研究を先

導されるとともに、本学の教職員、学生に対し先生のご業績や経験等を教授いただきました。2012年度東京大学学部入学式では、根岸先生より祝辞をいただき、本学の学生に「まず好きなことを見つけてとことんやって

みる」ことの大切さをお話いただきました。先生の学術への多大なご貢献に感謝申し上げます。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。令和3年6月12日 東京大学総長 藤井輝夫

表紙について 日本各地の自治体等が魅力とビジョンを描いた大漁旗を制作して安田講堂に掲揚する「大漁旗プロジェクト」のフィナーレイベントが7月4日に行われました。北海道から鹿児島まで、鮭や鯛やムツゴロウからロケットにスナメリにゾウキリンまで、52自治体等が各々ご当地アイテムを描きこんだ入魂の旗が大講堂を埋め尽くす姿はまさに壮観。ニコニコ生放送では多くの応援コメントが書き込まれ、全チームにエールを贈った運動会応援部とともに、足掛け2年に及ぶプロジェクトのフィナーレを盛り上げました。



(左) 大講堂を彩る大漁旗。(右) プロジェクトを紹介する岸利治先生と松山桃世先生

※「学内広報」では広告掲載を受け付けています。出稿を検討したいという皆様のお問い合わせをお待ちしております。↓本部広報課(03・5841・2031)



分野協働の学び

美術家の野老朝雄さんが手がけた東京2020エンブレム『組市松紋』は、3種類の菱形が隙間なく平面を充填する幾何学にもとづいて構成されています。このように幾何形状の単位を並べて平面、曲面、空間を構成する原理は、古今東西の紋様、空間構造物、セル材料、結晶や準結晶の原子配列、あるいはウイルスのカプシドの自己集合など、自然現象や人工物に普遍的にあらわれます。こうした「かたち」を通した学問のつながりをたどりながら、実際に手を動かして紋様・構造・現象を作品として創作する授業『個と群』を、野老さんとの協働で行っています。

この授業は、教養学部前期課程ではじまった文理融合ゼミナール（芸術創造連携研究機構と心の適応と多様性の連携研究機構が開設）の枠組みで開講されています。文理融合ゼミナールは、多様な芸術の実践から創造的プロセスを獲得し、様々な学問とのつながりを学び、さらに興味のある学生には最先端研究にさらされる機会を提供することを目指しています。前期課程の学生が対象ですが、授業中に新規の問いを得て、国際会議での発表につながった学生もいます。われわれの取り組みにご興味がある教員の皆様、ぜひお声がけください。

このようにArtをSTEM教育に加えた

STEAM教育は、世界的なトレンドとなりつつあります。STEAMという言葉自体は新語ですが、そのアプローチは古くからある普遍的なものです。ギリシア哲学においても、ルネサンスにおいても、芸術・数学・科学・工学は不可分に展開しました。各学問領域が高度に発展した現代において、分野横断は一筋縄ではありませんが、情報技術が橋渡しをして協働を加速しています。誰も子供のころは、工作をすることや歌うこと、身近な世界の観察や遊びを通して、数や言葉や科学などの諸概念に触れてきたと思います。こういった原初の学びのワクワク感が最先端の分野協働につながる、ということを、学生に感じてもらえたらうれしいかぎりです。

館 知宏
(総合文化研究科)



授業から生まれた、負のポアソン比をもつ準周期的キリガミ構造。Warisaya, Tokolo, Tachi, "Harmonized Chequered Mechanism," Bridges 2020 Art Exhibition, 2020.

